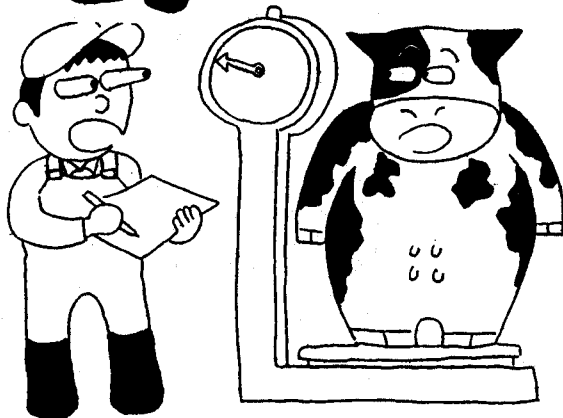
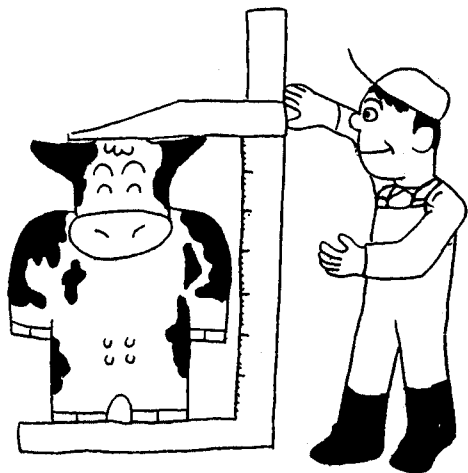


XI. 育成牛の健康チェック

早く知り、早く手を打ち、軽く済ませる
これが育成のプロになる第一歩なり



苦しいの
助けて欲しいと
目で訴える

メモをとり
少しの変化も
見逃さず

体重計
何時
に
測る
か
を
決
め
る

近づけば
異常がないかと
心配りを

扱いは
早く終らす
ことばかり

親心
を
か
ん
じ
る

1 意識的にチェックすることの大切さ

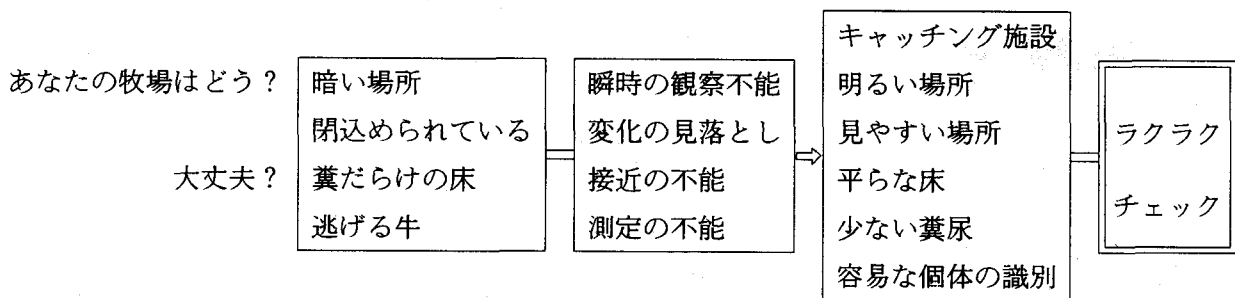
(1) チェックの目的

チェックはできるだけ軽い症状で不健康状態を把握し、素早く適切な対策を講じるためにあります。そのためには『チェックをするのだ』という強い目的を持って実行する事が大切です。意識的に常牛を観察する作業の繰り返しが、瞬時に極めて軽い内に異常を発見する能力を高める様になるのです。個体の変化を早期に発見し、対応する事により被害を最少限に食い止め、回復を早めることが出来ます。乳牛を飼養する条件に大巾な変化が起っている以上、酪農家の健康管理方法にも大巾な変更が求められています。以下にその要点を説明します。

(2) チェックの区分

生育ステージ 区分	月令	誕生	→ 3	→ 6	→ 9	→ 12	→ 15	→ 20	→ 24	
チェ ック	日常	←いつもと違う状態の発見(ムード、目や耳や鼻の状態、歩様、糞の状態・PH、体温)→								
	節目	出生	→ 離乳	→ 群飼	開始時	移行期	→ 放牧	開始時	→ 種付	→ 親移牛舎動
計測		←————— 体高や体重(毎月とかポイント毎) —————→								

(3) チェックのための基本条件

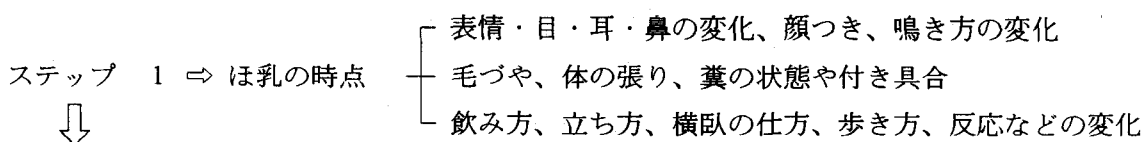


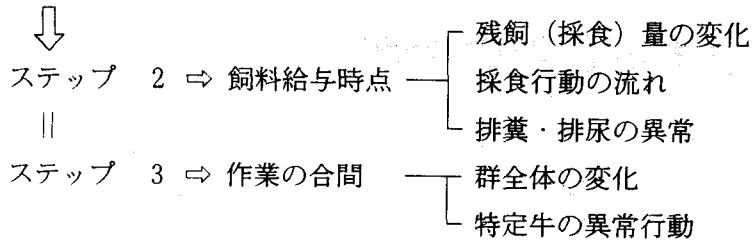
2 チェックのテクニックあれこれ

(1) 日常のチェック〔毎日必ずチェック、特に哺育牛は哺乳毎に実施〕

毎日する作業はつい惰性的になり、早く終らせたい一心のものになりがちです。また、何かをしながら、例えば哺乳しながらとか、エサ給与をしながらとかの作業では本気の早目チェックは出来ません。だからこそ尚更、意識的にその目的を果たす独立した仕事として、日常チェックを繰り返すことが大切です。その本気さがあなたの技術を更に高めるのです。意識的に見る順序を決めておく。

① 通常チェック



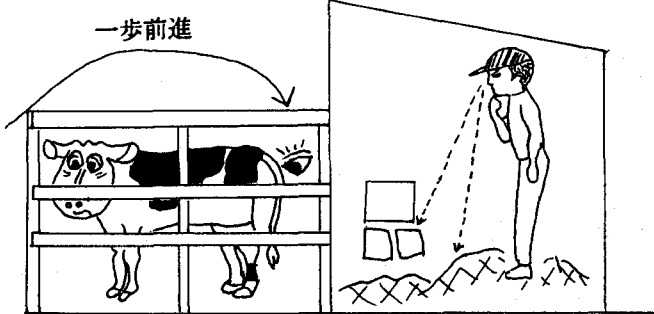
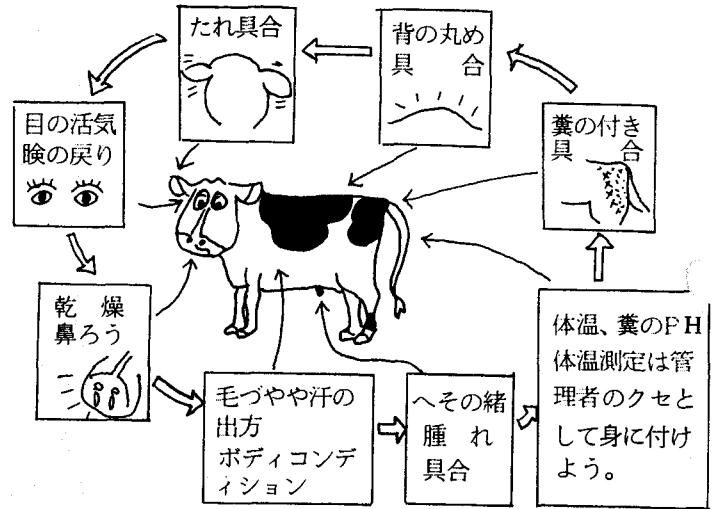


② 何か異常を感じたら…本気でチェック

◎ 一步前進チェック

ハッチや暗い場所では、一步近づくと観察行動で、より確実に詳しく確認する事が可能となります。

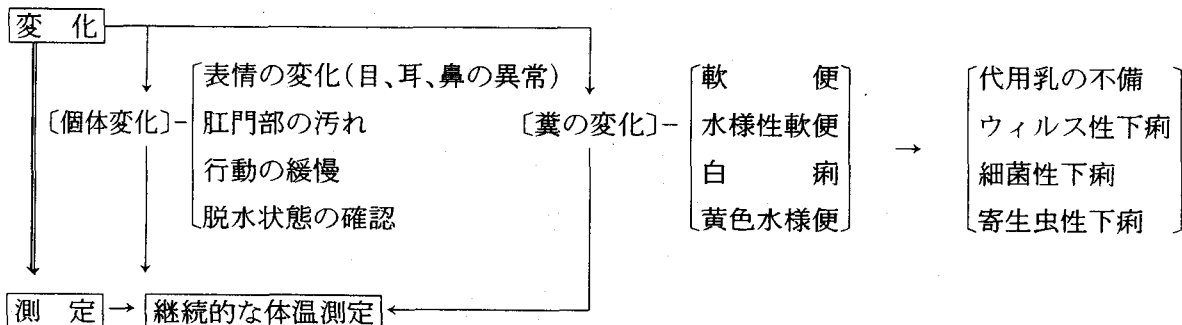
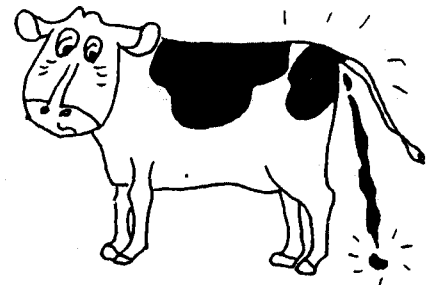
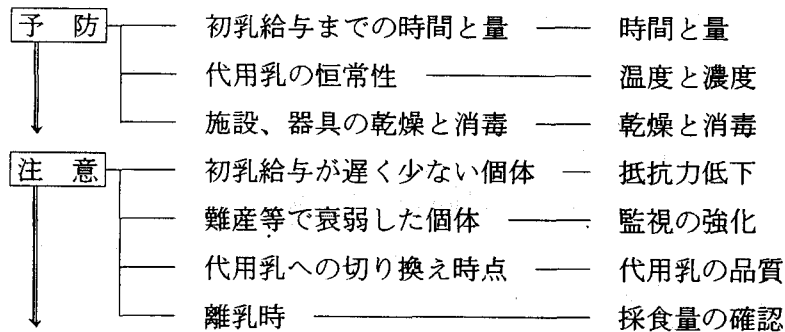
- ・ハッチ内の糞の状態
- ・肛門周辺の糞の付き具合
- ・屋内の換気や湿気
- ・マブタの戻り具合
- ・体温や糞のPH測定

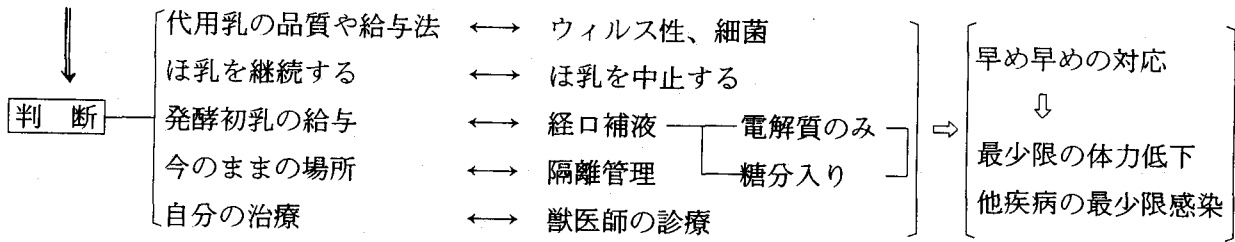


◎ 一周チェック法

（少しでも異常を感じたら個体を一周）
（本気で再確認）

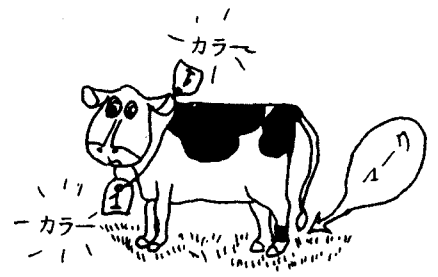
③ 哺乳牛の下痢に対するチェック（例）





④ 個体識別

グループで管理されている牛は、先ず個体識別がはっきりしていなければなりません。何番の牛が異常を訴えているのか？何番の個体が順調に発育しているが、それを判断するためには少し遠目でも個体識別が可能な様にマークされていなければなりません。① 人の目に付きやすいような配色と牛舎構造 ② 対象牛から目を離さず接近できるためのマンパス ③ タックの利用。両耳、首、色分けなどにより、かなり意図的な分類ができるはずです。



⑤ 心の交流

育成牛は体全体で会話を求めています。あなたは十分に育成牛の話し相手になっていますか。調子が悪い時は顔の表情を変えるだけでなく、行動や糞の状態を変え、あらゆる手段を使って訴えています。管理の人が早く分ってくれない事が多く、牛達はイライラの連続ではないでしょうか。

モウさんは、モウあきらめて、モウも出ず



⑥ チェックシート

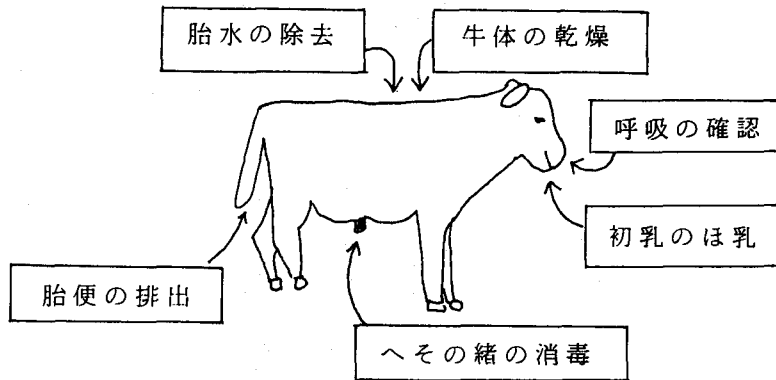
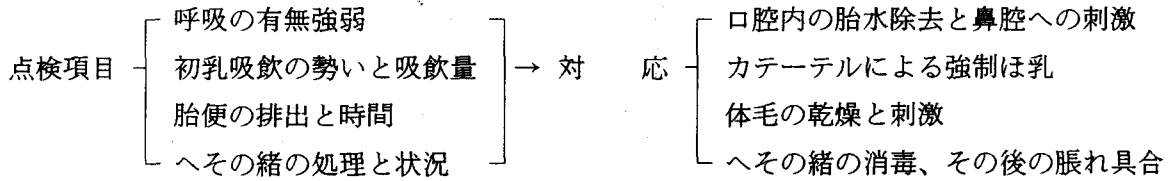
健康管理カード (例) 異常を感じた時は順番を決め、完全にチェックして記録する。

番号	名 号		生 年 月 日										
調査 月 日	表 情	変 化			状 態			行 動			糞 状態	脱水 (臉)	具 体 的 処 置
		目	耳	鼻	毛	尻	体	採食	寝方	歩様			
備考	何か変だ (✓) 少し異常 (△) 異常 (×)												

(2) 臨時チェック

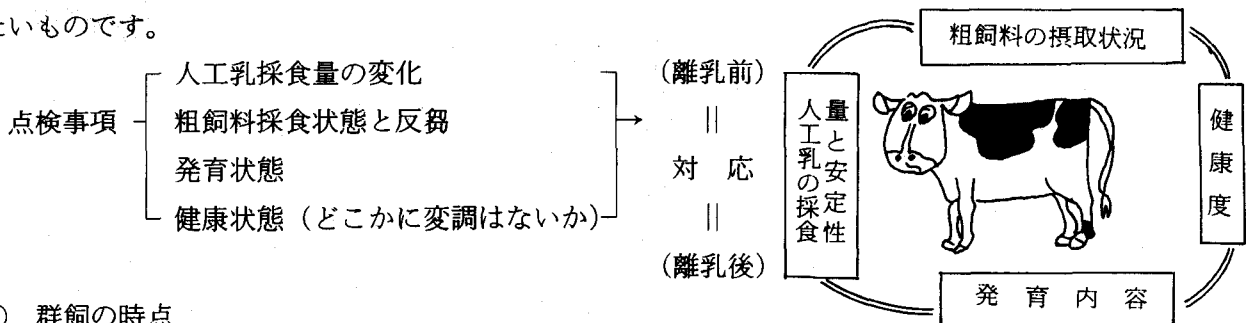
① 出生時点

生命保持と新生子牛の汚染防止のためにチェックをする。また、難産や事故を未然に防止するため、事前にチェックを行きましょう。



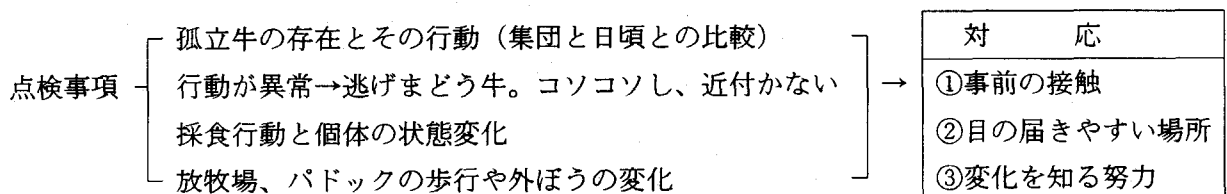
② 離乳時点

人工乳（離乳食＝スターター）の採食状態（量）が離乳の決め手です。また、離乳後は体調激変を起こしやすい状態になります。この時点のチェックにより、離乳によるストレスを最少限に食い止めたいたいものです。



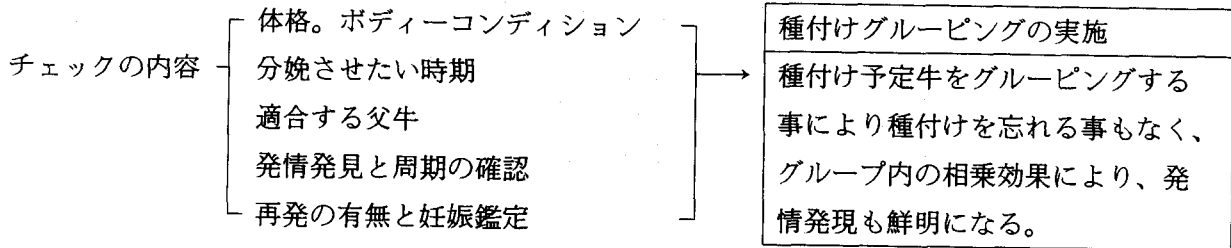
③ 群飼の時点

はじめて群に入れたり、次の群に編入したりする場合は特に留意が必要です。それは個体の精神的安定は群内の序列の確定と安定によって得られるからです。いじめられやすい条件を持っている牛は事前にチェックをしておきましょう。また、弱い牛を早めに見抜き対応しましょう。弱い牛が安心・安全に生活できる条件整備も又大切です。



④ 種付時点

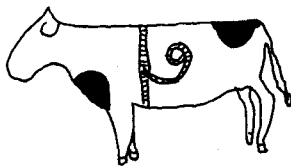
種付けのための諸条件が満たされているかのチェックが必要です。個体別に適切な種付けのためのチェックがなされれば、初産時において安定的な生産が保証されます。



(3) 定期的な測定

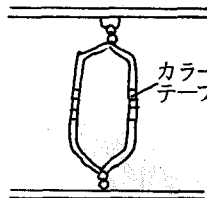
定期的な体重、体高、ボディーコンディションのチェックにより発育状況を知り、技術的な適否を判断する。そして、目的どおりの状況になっていないなら技術的な再検討をする。この定期的な測定のデータは育成技術の適否を如実に表現し、次への改善策を示唆してくれます。

○ 体重測定

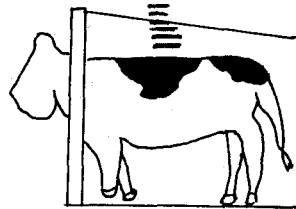


体重推定尺

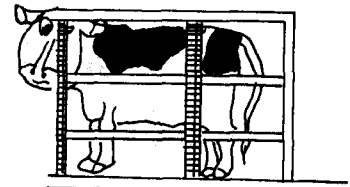
○ 体高測定



スタンションテープ



壁へのマーク



メジャーの取り付け

体重、体高の測定やボディーコンディションのは握はあまり行なわれていません。しかし、定期的に測定する（全頭とは限らない）事で育成牛との接触機会もふえ、測定の効果のみならず異常の発見や馴致の効果も期待できます。簡易に測定できる条件の整備をしましょう。測定する度に牛に大変なストレスを与えるのでは返って損でしょう。おまけに、不備な測定場所はデータがデタラメになりやすく、2重の損になります。また、ボディーコンディションのは握は育成牛が太っているのか、やせているのか、太りつつあるのか、やせつつあるのか、あるいは横バイなのか…を総合的に判断する事ができ、日頃からは握技術を身に付けておく必要があります。